

＜ 今日の説教のポイント ルカによる福音書 14 章 1～6 節 ＞

1 前にも出てきた話では？ 大事だから何度も 一律法厳守か、愛か。

安息日に病人を治していいのか。このテーマの話は今までも出てきています(6:6-11, 4:31-41)。特に 13 章 10 節以下は直前であり、ほぼ同じ内容です。なぜルカは繰り返し記したのか？ 大事だからでしょう。私たちも、もう一度、学び直しておきましょう。ファリサイ人の言い分は、「安息日は神様を感謝することに用いる日、病を治すことは他の日にできる」ということです(13:14)。イエス様は神様を軽んじたのでしょうか？ そうではないでしょう。「安息日に神様に感謝することと苦しむ者の苦しみを取り去ることは相反していない、神様も喜ばれることである」、そう示されたのではないのでしょうか。ファリサイ人が「安息日に自分の子が死にかけたらどうするか」と問われて答えられなかったことに、自分のことは忘れて他人には厳しい私たちの姿を見る気がします。

2 しかし、使徒会議では話題に上らず。聖書の中でも変化している。

キリスト教が始まってしばらくして開かれた使徒会議(使徒言行録 15 章)でも、まだファリサイ人的考え方が残っている人たちとの間で同じような問題が起きました。しかし、そこではもうこのテーマ(安息日に病気を治していいか)は出てきていません。しかし、なお幾つかの禁止事項の言い渡しがなされています(15:19-21)。この変化をどう考えるかが大事です。聖書の中でも変化していることを踏まえた信仰理解を持たなければならないということです。

3 主イエスは、神様を愛し、隣人を自分のように愛する道を示された。

今、私たちはこの時残された禁止事項を守ってはいません。この時よりさらに「神に立ち帰る異邦人を悩ませてはならない」(15:19)ことを考えた結果と言えるでしょう。それでいいのだと思います。なぜなら、神様を大事にして生きることと隣人を自分のように愛することは矛盾しないとイエス様は教えられたからです(マタイ福音書 22:34-40、レビ記 19:3, 18)。私たちもそういう信仰理解をさらに深めていくとき、私のような者を赦し、愛し、守り導いて共に歩んで下さる神様を何よりも大事にするからこそ、またどんな隣人(色んな意味での違いを超えた異邦人)をも愛することができる者になっていくことができるのです。